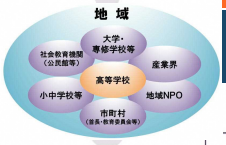
第1回 北九州市後期中等教育に関する検討会議
話題提供

今後の後期中等教育に求められる要素は何か？

令和2年1月24日（金）・北九州市

大正大学 地域構想研究所
教授　浦崎 太郎



大正大学

視点 育成を目指す資質・能力（新指導要領）

① 何を理解しているか　何ができるか
（知識・技能）

② 理解していること・できることをどう使うか
（思考力・判断力・表現力）

③ どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか
（学びに向かう力・人間性等）

「主体性・多様性・協働性」「メタ認知」も含む

「Society 5.0」と「探究」

Society 1.0　狩猟社会　（縄文）
Society 2.0　農耕社会　（弥生～江戸）
Society 3.0　工業社会　（明治・大正・昭和）
Society 4.0　情報社会　（平成～）
Society 5.0　ＡＩ社会　（もうすぐ？）

■ Society 5.0（AI時代）
人間にしかできないこと ＝ 探究

Society 5.0（＝ＡＩ時代）に必要な力

■ 人間には容易だがＡＩには困難なこと

① 現場で「感じる」こと
② 問いを立てること
③ 意味を味わうこと

探 究
（自問自答）

・課題発見（問い）には
現場（地域）で「感じる」ことが必要
・感性には個性 → 探究テーマは高い個別性

これからの時代に必要な力

■ Society 5.0（AI時代）
人間にしかできないこと ＝ 探究

■ Society 4.0（情報社会・・ネット社会）
知識は瞬時に賞味期限切れ
・・「知恵を生み出す」力が必要
・・「三人寄れば文殊の知恵」
・・「徹底的に個性を伸ばす」ことが必要

若者が帰属意識をもつ集団・場所

「そこの価値を実感できる」「楽しい」のほか・・

① 親近感・一体感をもてる人たちがいる
② 自分をそこで表現できた
③ 自分がそこで成長できた

若者は自分に無関心な地域には戻ってこない
信頼を寄せる大人から誘われれば
喜んで参加し、一緒に挑戦し、表現・成長できる

人材の育成・回帰にむけて必要な投資

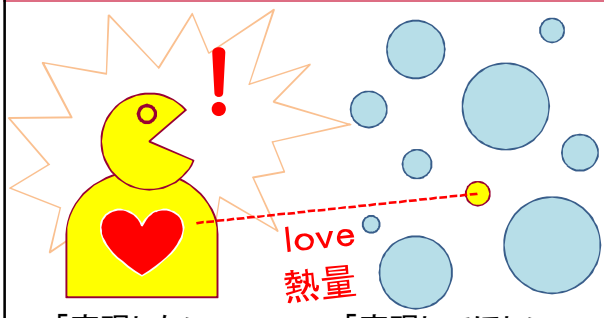
■ Society 5.0（AI時代）の教育
一人ひとりの感性・興味関心に応じた探究

■ Society 4.0（ネット社会）の教育
‥「三人寄れば文殊の知恵」
‥「徹底的に個性を伸ばす」

■ 若者が帰属意識をもつ地域
① 大人（≒地域課題）との一体感がある
② 興味関心に応じて成長・表現できる

「公正に個別最適化された学び」が必要

育成したい高校生像



「実現したい」　「実現してほしい」

“夢中は努力に勝る”

Society 3.0 の教育 vs 4.0 の教育

3.0（工業社会）	4.0（情報社会）
・定型作業に需要	・価値創造に需要
・人も規格品が有利	・尖った人物が有利
・生徒は学校に従属	・学校が個性を開花
・興味関心を封印	・興味関心を尊重
・全員一律（40名ｸﾗｽ）	・学びの個別最適化
・管理強制	・挑戦に伴走
・人や社会から遮断	・人や社会と繋げる
・学校で完結可能	・学校で完結不可能

平成は世界の潮流に逆行して衰退した時代

社会の変遷 と 次世代の育成

■ Society 2.0（農耕社会） ‥ 均質性重視
・先祖伝来の土地や文化をそのまま継承
・個性や抜きん出た才能は不要

■ Society 3.0（工業社会） ‥ 均質性重視
・「規格品の大量生産」が富の源泉
・人も「規格品の大量生産」‥個性は封印

■ Society 4.0（情報社会） ‥ 多様性重視
・“三人寄れば文殊の知恵”が富の源泉
・「個別最適化」で熱情や個性を徹底開放

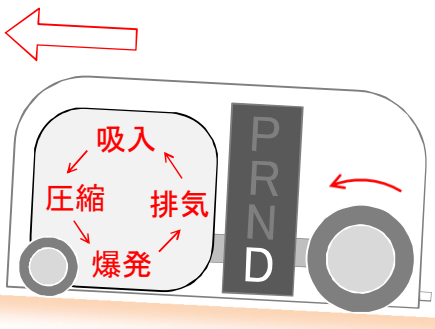
高校生に対する意識・態度

■ Society 2.0 （衰退が不可避な地域）
・人は生まれ育った地で生きていくものだ。
・地域の担い手は地元出身者だ。
・進学や就職で外に出すな！
・長老の言うことを聞け！
・今まで通りのやり方に従え！
・勉強させるな！‥出たら帰ってこないから
・郷土愛を植え付けろ！
・外に出ても戻って来い！
・言うことを聞く者なら 外来者は歓迎！

高校生に対する意識・態度

■ Society 4.0～ （再興していく地域）
・生きる道は“三人寄れば文殊の知恵”だ。
・自分ならではの才能を存分に伸ばせ！
・最大限に成長&表現できる環境を選べ。
・才能をフルに活かせるところで生きよ。
・専門性を高めて広い世界を渡り歩け！
・地元に戻ることは優先しなくてよい。
・この地で成長&表現したい若者は大歓迎！
・この地にある資源を活かして、何かを一緒に創り出していける人物は大歓迎！

“自動車の走行”と“学習作業”の対比

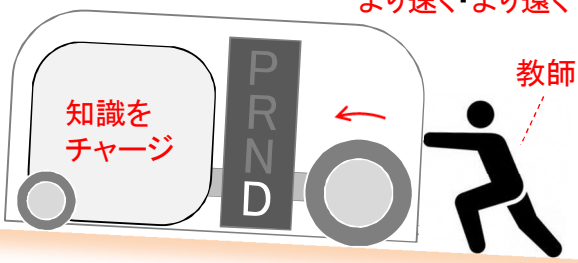


エンジンの動力をギアを介して駆動輪に伝える

“自動車の走行”と“学習作業”の対比

平成中盤からの“学力向上策”

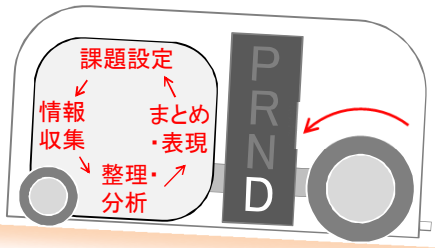
“より速く・より遠く”



押されると“頭を使う”　押すと“重い”

“自動車の走行”と“学習作業”の対比

“丸暗記はダメだ” “探究だ”



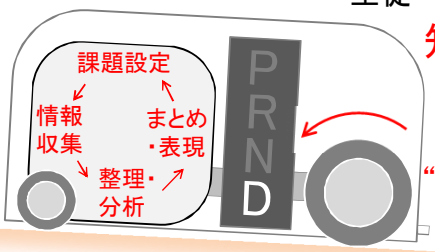
力強く自走

文部科学省のイメージ

“自動車の走行”と“学習作業”の対比

エネルギー源は、
生徒一人ひとりの

知的欲求



“知りたい”
“学びたい”
“実現したい”

どこでどう調達すればよいか？

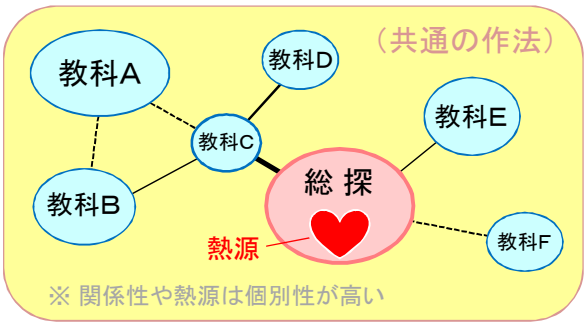
高校生の地域探究 ‥ 課題設定 8箇条

① 自分が心底「これをやりたい！」と思える。（ジブンゴト）
② 自分の特技や持ち味を活かし、これを伸ばして成長でき、自分の個性が社会で役立っているイメージを持てる。（進路展望）
③ 学校の諸科目と「より広く・より深く」つながっている。（学ぶモチベーションの向上）
④ 仮説「～すると～なるはずだ」があり、これを検証できる。（探究プロセスが含まれる）

高校生の地域探究 ‥ 課題設定 8箇条

⑤ 地元（個人・地域）に具体的なニーズがあり、快く支援が受けられる。（多様な人々の共感的な参加を期待できればベスト）
⑥ 先生や地元の方々が連絡・調整・経費面で負担感を覚えない。（実現性）
⑦ 評論家的な提案に終わらず、知恵を絞り、汗を流すことで、課題解決に貢献できる。（‥提案・計画は「仮説」、行動して「検証」）
⑧ 決められた期間内に「一話完結」できる。（‥壮大な構想の尻切れトンボはダメ）

カリキュラム･マネジメント と 個別最適化



各生徒の中で「学びが組織化」されているか

自分の生活･学習スタイルに合わせて、平日の週１日から週5日まで自由に登校

同一教材を同一ペースで学ぶのではなく EdTech を活用した自分に合った最適な学び

自分の興味･関心に応じた学びにより、主体性･社会性･探究力･創造性等を身につける

自分で時間をカスタマイズ ･･ 好きなことにチャレンジ

“高校教育”改革 ･･ 未来予測

■ 令和初年

Society 5.0 にむけて高校をどう改革するか？

■ 幕末

Society 3.0 にむけて藩校をどう改革するか？

- まもなく 同じ現象が起こる
- 本質は「若者の学びをどう変えていくか？」
- 大局的には 経産省“未来の教室”が整合的
- 藩校 約270校中、今日へ続いたのは約30校

「高校 3.0」＝「受験戦士量産校」の終焉

一人ひとりが個性･持ち味を最大限に開花

↓ 「学びの個別最適化」が必要

探究 ･･ 一人ひとりの興味や関心に対応

教科 ･･ 〃 ペースやプロセスに対応

↓ 「N高等学校」等に兆し

「自分自身の成長」を実現できない高校へ
時間や金銭をかけて通学し、一日ガマンして過ごす価値は何か？」に答えられるか？

「高校 3.0」＝「受験戦士量産校」の終焉

変革が困難	変革が容易
都市部	周辺部
危機感なし	危機感あり
感覚や情報が古い	感覚や情報が新しい
内向き･閉鎖的	外向き･開放的
「全員一律」指向	「個別最適化」指向
高校も地域も大規模（身動きが困難）	高校も地域も小規模（身動きが容易）

「高校」の今後

高校や自治体の対話性が 高い場合

① 現在の高校を母体に次の“学校”ができる

高校や自治体の対話性が 低い場合

② 地域主体で「探究」を運営 ＋ ネット学習

③ 中学卒業後 海外or他県の“学校”へ流出

このような可能性も視野に入れた検討を期待

地方は「Society 2.0」からの卒業を

大正大学地域構想研究所　教授　浦崎 太郎

地方創生が始まり、若者の“地元定着・地元回帰”が叫ばれるようになって、5年の歳月を迎える。他方、日本は今、Society 5.0 ‥ ＡＩ社会への転換を迫られている。ところが、両者は残念ながらリンクされることなく語られている。

地方創生が第1期の5年を終え、まもなく第2期の5年が始まるにあたり、「若手人材確保」と「Society 5.0」の関係を冷静になって考え直す必要があるのではないかと思っている。その核心は、地方が「Society 2.0 を卒業する」ことだ。

はじめに、Society 1.0 から 5.0 の用語を確認しておこう。1.0は狩猟採集社会で、日本では縄文時代が該当する。同様に、2.0は農業社会で、弥生～江戸時代。3.0は工業社会で明治～昭和、4.0は情報（インターネット）社会で、概ね平成時代以後。そして5.0は令和には訪れるかもしれない時代だ。ここで重要なのは、各々の社会において「次世代の育成や確保」の最適解が異なる点だ。

Society 2.0 では、先祖伝来の田畑を技法とともに継承することが求められるが、そこに個性や抜きん出た才能は必要とされない。

Society 3.0 は、規格品を大量生産することによって、個人も会社も国も豊かになれる社会であり、人材も「規格品を大量生産」するのが合理的だった。個人の興味関心やこだわりは封印し、与えられた学習課題を「忍耐力を発揮し」「努力して」「速く正確に」習得するが求められた時代であり、今日、大人から子供まで、この学習観が染みついている。

Society 4.0 は、インターネットによって知識のもつ価値が瞬く間に賞味期限を迎えることから、新しい知識・知恵・価値を常に生み出し続けることが求められる社会だ。そして、この時代に必要とされるのは“三人寄れば文殊の知恵”に加われる、徹底的に突き抜けた人材だ。それには、一人ひとりの興味関心、いや、パッション（情熱）に基づき、一人ひとりに適合した学びが必要とされる。

そして Society 5.0 は「ＡＩが苦手とし、人間が得意とする力」すなわち「感じる・問いを立てる・意味を味わう」力を発揮することが求められる。具体的には、自問自答‥探究する態度や能力だ。

以上をふまえて、地方における若年人口の出入りに関する変遷を概観していこう。

Society 3.0 の時代には、地方の人余り感と都会の人手不足感によって、地方から都会への人材移転が進行した。その後、この仕組みが強力に稼働したまま、Society 3.0 は終息し、Society 4.0 に移行。地方では昔年に比べて出生数が大幅に減少しているにも関わらず、若者の流出は従来通りに進行。「地方創生」によって初めて現実を自覚した、というのが今日までの流れだろう。

問題はここからだ。今後を考える上で決して忘れてならないのは、Society 2.0 的な地域風土が色濃く残る地方社会も、厳然として Society 4.0 に組み込まれており、人材の育成や確保も、少なくとも Society 4.0 に合わせて進める必要が高い点だ。

ここで、この視点から、地方の人々が持っている感覚を見直してみよう。地方には「若者を地域の外に出すな」「郷土愛を植え付けよう」と語る人々が少なくないが、これはまさに「Society 2.0」の発想だといえよう。地元で伝承されてきた、ある意味、誰でも習得できる程度の考え方や技法だけでは、地方社会が立ちゆかない現実を直視する必要がある。もし「Society 2.0」のまま行きたければ、地域外との物流や情報を直ちに遮断するほかない。

では「地元回帰」という考え方はどうか。もしそれが「人は皆、生まれ育った地に戻ってくる必要がある」という認識に基づくものならば、まだまだ「Society 2.0」に支配されていると見るべきだろう。

Society 4.0 では、一人ひとりが突き抜け、固有の才能を周囲との協働によって最大限に発揮することが求められる。その際、最も活躍できるフィールドは本人が生まれ育った地であるとは限らない。すなわち、個々の幸福という観点に立つと、自分の才能を最大限に発揮できる地こそが最適であり、地元回帰は必ずしも最適解とはいえないのだ。他方、今その地域に必要な才能を備えた人材は、その地域の出身者であるとは限らない。つまり「郷土愛・地元回帰」を迫るのは、地域にとっても最適解とは限らない訳だ。

以上より、Society 4.0 の時代、本人のためにも地域のためにも最適なのは、一人ひとりの才能を最大限に開花させ、人材の広域的な流動性を高める方向性である、ということができる。そして高校教育も、たとえ統廃合が懸念される過疎地の小規模校であっても、いたずらに「地元のため」に走るのではなく、学習指導要領が指し示しているとおり「世界のどこに行っても活躍できるよう能力を高める」ことを大切にしていくことが重要だといえよう。

ここで改めて、地方において、元気をます地域、元気を失う地域を見比べてみると、前者は人材の広域的な流動性を大切にし、後者は否定している様子が分かるであろう。

地方創生が第2期を迎えようとしている今、地方創生を Society 5.0 と関連づけて捉え直し、若手人材の育成や確保においてもバージョンアップをはかる地方自治体が増えることを期待したい。

（大正大学地域構想研究所メルマガ 令和元年11月15日号より）